

# すくもりょうしゅ いがし 宿毛領主 伊賀氏

宿毛は、小野梓など、多くの豊かな人材を世に送り出したことで広く知られていますが、なぜ宿毛ではそのようなことがおこったのでしょうか。

ほかの地域にこんな例はあまりないのに、宿毛だけとは不思議な話です。

なにか理由があるに違いありませんが、今日はそのいくつかを考えてみましょう。

## 変わろうとする日本

今から150年ほど前、特に宿毛から多くの人材が世にでたこの時期、日本は大きく変わろうとする時代を<sup>むか</sup>迎えていました。それまで数百年も続いていた武士中心の長い時代が終わろうとしていたのです。

それは、ずっと外国との交流を<sup>きょくたん</sup>極端に少なくしてきた日本に<sup>はんぱつ</sup>反発して、アメリカなどが<sup>くろふね</sup>黒船と呼ばれる<sup>ぐんかん</sup>軍艦でやってきて、<sup>おどか</sup>脅しながら<sup>せま</sup>盛んな交流を迫ってきたことがきっかけでした。



日本に来てアメリカとの交流を迫ったペリー



黒船

当時の政治の中心は江戸（今の東京）の<sup>ぼくふ</sup>幕府で、<sup>さいだい</sup>将軍が最大の<sup>けんりょくしゃ</sup>権力者でした。そして今の都道府県にあたるものは「<sup>はん</sup>藩」といわれていました。

全国の藩を幕府が<sup>しはい</sup>支配していましたが、藩も今の都道府県よりはるかに<sup>どくりつしん</sup>独立心が強くて、むしろ一つの藩が一つの国家のような<sup>かんかく</sup>感覚で他の藩と<sup>せつ</sup>接していました。

藩<sup>さかい</sup>同士の<sup>こ</sup>境を越えるときも<sup>つうこうてがた</sup>通行手形が必要です。現在のパスポートのようなもので、外国に行くようなイメージです。

藩の代表者が<sup>はんしゅ</sup>藩主で、藩主を中心に藩内の政治がおこなわれます。一部の例外を<sup>のぞ</sup>除けば、その藩に暮らす人々にとってはその藩の中がすべての世界です。

そのような時代が、黒船の大砲の音で急に揺らぎだしました。実際に黒船を見た人々の不安が、幕府に対する不安に変わるまで、さほど時間はかかりませんでした。

それは、幕府が安心できる対策をとることができなかったからです。結局、横浜などの数ヶ所でさまざまな外国との交流が日本に不利な形で始まっていました。

それでいくつかの藩は、外国からの脅威を前に右往左往する幕府を信じきれなくなり、いっそ幕府を倒して新しい世の中をつくってはどうか、と考えるようになりました。

新たに目指す日本の政治は、最大権力者が将軍ではなく、天皇を頂点に、日本中から集まる人々によって開かれる会議がすべてを決定する仕組みです。

これには、外国から入ってきた新しい考え方や社会の仕組みが、大きく影響しています。最初は外国の脅威を敵視していた人々も、次第に積極的に受け入れる考え方に変わってきていたのです。

このような時です、宿毛で多くの人々が動き出したのは。

## 宿毛領主伊賀氏

宿毛の近海にも黒船がやってきていました。武力で追い払おうか悩みますが、現場責任者が黒船に乗りこんで尋ねると、攻撃の意思はない上に翌日出航するとのことだったので、無事武力衝突しないで済みました。

しかし、時代が大きく変化しつつあることを肌で感じとった宿毛の人々は、きたるべき新しい時代にどう反応するか、真剣に考えるようになりました。

そのとき、宿毛のリーダーだったのが、領主伊賀氏です。

伊賀氏は土佐（今の高知県）藩主山内氏から、宿毛の領主を代々約250年間任され、土佐藩内でも家老でした。

初代宿毛領主可氏は初代土佐藩主山内一豊の姉、北方様の長男で、土佐の西の重要地点である宿毛に領主としてやってきました。美濃（現在の岐阜県）の生まれです。そしてその後子孫が、絶えず宿毛領主として宿毛を支えてきたのです。



山内一豊

北方様の書ダンス



こうした中で迎えた<sup>げきどう</sup>激動の時代、そのときの宿毛領主は11代<sup>うじさと</sup>氏理でした。  
しかし<sup>うじさと</sup>氏理はそれ以前から宿毛のために準備をしていました。

学校の充実です。

もともと宿毛は教育熱心で、武士に限らずさまざまな人が<sup>がくもん</sup>学問に<sup>こころざし</sup>志をもって  
<sup>べんがく</sup>勉学に<sup>はげ</sup>励み、<sup>せんぱい</sup>先輩が<sup>こうはい</sup>後輩を教え、あるものは教師になり、あるものは学問を活かし  
て宿毛の発展に<sup>つ</sup>尽くしていました。

<sup>うじさと</sup>氏理は、この<sup>こうがくしん</sup>向学心をますます<sup>さか</sup>盛んにするため、小さな<sup>しせつ</sup>教育施設を次々に<sup>かくだい</sup>拡大し、  
<sup>さいしゅうてき</sup>最終的には今の宿毛小学校の場所に、<sup>にっしんかん</sup>日新館という学校をつくりました。



11代宿毛領主 氏理



日新館跡(現在の宿毛小学校)

外国との交流がまだ<sup>とほ</sup>乏しかった当時、日本で唯一<sup>ゆいいつこくがい</sup>国外の<sup>え</sup>情報が得られるのは九州  
の長崎でした。当時の日本での学問は、主に日本や中国の古い<sup>れきししょ</sup>歴史書を教科書にし  
ていましたが、宿毛の人々は長崎から広まる「<sup>らんがく</sup>蘭学」と呼ばれるヨーロッパやアメ  
リカの<sup>じょうほう</sup>情報も、学問として<sup>びんかん</sup>敏感に取り入れていました。

当時日本でも先進であった宿毛の教育によって<sup>はぐく</sup>育まれた人材が、その後訪れる激  
動の時代に次々と表舞台に<sup>おもてぶたい</sup>でていくことになります。すべてが<sup>うじさと</sup>氏理の家来であり<sup>けらい</sup>領  
民でした。

先ほどの黒船に乗り込んで無事解決した現場責任者で、のちに<sup>じつぎょうか</sup>実業家として成功  
した<sup>つな</sup>竹内綱もその一人ですし、小野梓も日新館で学んでいます。

のちの話ですが、国会議員で<sup>のうしょうむだいじん</sup>農商務大臣にもなった<sup>ゆうぞう</sup>林有造が<sup>しきよ</sup>死去する時、<sup>ゆいごん</sup>遺言と  
して、

「死後もご領主をお守りしたい。ご領主が<sup>ほうむ</sup>代々<sup>いっかく</sup>葬られている墓地の一角に私の墓を  
建てさせてもらえないでしょうか。」と<sup>ゆる</sup>願い許されて、現在も宿毛市桜町の伊賀家墓  
地の中に<sup>うじさと</sup>建てられています。氏理と宿毛の人々の<sup>しめ</sup>関係を示す一つの例でしょう。

そして、宿毛が多くの人材を世に送り出す<sup>ちから</sup>強い力となった小野<sup>ぎしん</sup>義真も、宿毛で後

輩の勉強をみるところからスタートしています。

義真は教育に携<sup>たすさ</sup>わる中で信頼<sup>え</sup>を得て、竹内綱とともに氏理<sup>うじさと</sup>の家来として当時大変<sup>きび</sup>厳しかった宿毛<sup>けいざい</sup>の経済<sup>くすのき</sup>の立て直しに取り組みます。そして楠<sup>しゅうのう</sup>から「樟脳」といわれる防虫剤<sup>ぼうちゅうざい</sup>を作<sup>はんばい</sup>って大阪<sup>おおさ</sup>などで販売<sup>おおも</sup>して大儲け、見事成功<sup>おさ</sup>を収めました。

義真はその後、実業家として成功しますが、いつも宿毛の後輩<sup>えんじょ</sup>を気にかけ、援助<sup>えんじょ</sup>をして、小野梓<sup>ふざんぼう</sup>や「富山房<sup>かしま</sup>」という書店を開いた坂本嘉治馬<sup>かしま</sup>などを育てました。

## 激動する時代と宿毛の人々

さて話を戻しましょう。

氏理<sup>うじさと</sup>が充実させた宿毛の教育が育てた人材、義真が立て直した宿毛の経済、この大きな二つの財産をもって、宿毛は時代の大きな変化に立ちむかいます。

宿毛の人々も、幕府を倒して新しい日本に変えていくことに賛成<sup>さんせい</sup>でした。そして実行のときがきました。

武士中心の政治をやめようというのですから、どうしても武力<sup>げきとつ</sup>による激突<sup>げきとつ</sup>がおきてしまいます。

ついに、幕府を守ろうとする立場<sup>たちば</sup>の人々、幕府を倒して新しい日本をつくろうとする人々が互いに譲<sup>たが</sup>らず、薩摩<sup>さつま</sup>（今の鹿児島県）、長州<sup>ちようしゅう</sup>（今の山口県）、土佐などの幕府を倒そうとする軍勢<sup>ぐんせい</sup>が江戸<sup>めざ</sup>を目指して進軍<sup>しんぐん</sup>、あまりの強さに将軍は最大権力者としての立場<sup>へんじょう</sup>を天皇<sup>てんこう</sup>に返上<sup>へんじょう</sup>します。これで幕府そのものは消滅<sup>しょうめつ</sup>しますが、しかし武力衝突<sup>りきく</sup>はなお終わらず、北越<sup>ほくえつ</sup>、東北、北海道へと日本人同士が戦う戦争が拡大していきます。

このような激動の時代の中で、以前よりは簡単<sup>かんたん</sup>に、藩<sup>はん</sup>をこえて日本中行き来できるようになると、宿毛の人々は次々と日本の中心、大阪（当時は大坂と書いた）、神戸、京都や東京、横浜へと進出<sup>しんしゅつ</sup>します。実業家として財産<sup>ざいざん</sup>を得るもの、戦争に参加するもの、それぞれに命<sup>いのち</sup>をかけて判断<sup>はんだん</sup>し、行動しました。

氏理<sup>うじさと</sup>の長男<sup>ちやうなん</sup>、陽太郎<sup>ようたろう</sup>もその一人です。





宿毛市桜町 伊賀家墓地 伊賀陽太郎

陽太郎は戦争が北越方面へと拡大していくとき、竹内綱を家来にして大阪で勉学に励んでいましたが、戦争に参加していた氏理の家来、岩村通俊が、

「今は学問をしているときではありません。宿毛領主の長男として兵を率い、北越に参戦すべきです。」と提案しました。

竹内綱は猛烈に反対しましたが、陽太郎は、

「それこそ私が考えていたことだ。」と賛成し、すぐに「隊長並」という立場で戦列に加わります。

そして同じ頃、氏理の家来の林有造や中村重遠などが、宿毛の人だけで軍隊をつかって、この戦争に参加しようと準備を始めました。宿毛では学問だけでなく、黒船の攻撃に備えて、大砲や銃、軍隊行動の訓練も普段から充分にしていたのです。

本来は藩ごとに軍隊をつかって出兵していましたが、宿毛にはまだ出兵していない意気盛んな人たちがたくさん残っていたわけです。資金も樟脳のおかげで大丈夫です。

出兵の募集に百名あまりが志願し、早速軍隊として出発しました。

この中には16歳の小野梓も含まれています。

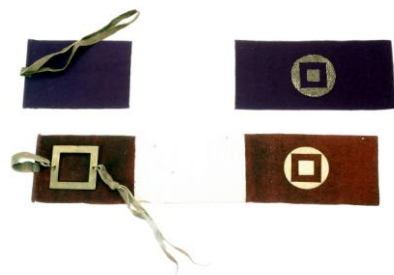
京都で「機勢隊」と名づけられ、北越に到着、陽太郎たちの軍勢と合流し、現在の新潟県内でともに各地を転戦します。陽太郎もさぞ心強く思ったことでしょう。

戦火が収まりゆく中で、機勢隊は宿毛に帰郷しますが、このように小さな地域で藩とは別に単独で軍隊を出兵させた例はほとんどありません。

梓をはじめ、この経験が後の人生に大きく影響した人はたくさんいたでしょう。



機勢隊員の陣笠 (伊賀家の家紋が見える)



機勢隊員の腕章

## 新しい時代と宿毛の人々

残念なことに多くの犠牲<sup>ぎせい</sup>がりましたが、大きな時代<sup>じよじよ</sup>の変化は、徐々に新しい日本をつくる方向に進んでいきました。宿毛の人々にとっては、それを信じ、願い、行動していたので、その行動がそれぞれの未来を開いてくれました。

北海道<sup>ほっかいどう</sup>開発<sup>かいはい</sup>庁<sup>ちやう</sup>長<sup>ちやうかん</sup>官<sup>くわん</sup>として札幌<sup>さっぽろ</sup>や旭川<sup>あさひかわ</sup>のまちをつくった岩村<sup>いわむら</sup>通俊<sup>とつしゆん</sup>、県知事<sup>れきにん</sup>を歴任<sup>れきにん</sup>した岩村<sup>いわむら</sup>高俊<sup>たかとし</sup>、農商務<sup>たかとし</sup>大臣<sup>だいじん</sup>林有造<sup>はやしありぞう</sup>、陸軍<sup>りくぐん</sup>大佐<sup>だいさ</sup>として姫路<sup>ひめじ</sup>城<sup>じやう</sup>の保護<sup>ほご</sup>を訴<sup>うった</sup>えた中村<sup>なかつむら</sup>重遠<sup>しゆうえん</sup>、三菱<sup>みつびし</sup>の創始<sup>そうししや</sup>者<sup>や</sup>岩崎<sup>いわさき</sup>弥太郎<sup>やたろう</sup>を補佐<sup>ほさ</sup>して実業界<sup>じつぎやう</sup>をリードし、東北<sup>こいわいの</sup>本線<sup>ほんせん</sup>や小岩井<sup>こいわいの</sup>農場<sup>のうじやう</sup>をつくりあげた小野<sup>おの</sup>義真<sup>ぎまこと</sup>、神奈川県<sup>しやうがいつ</sup>でマリヤ・ルーズ号<sup>たか</sup>事件<sup>じけん</sup>を解決<sup>かいげつ</sup>し、その後は人権<sup>じんけん</sup>問題<sup>もんだい</sup>に生涯<sup>しやうがい</sup>尽<sup>つ</sup>くした大江<sup>おほえ</sup>卓<sup>たく</sup>。

すべて、激動<sup>きうごう</sup>の時代<sup>じだい</sup>を生き抜<sup>ぬ</sup>いた経験<sup>けいけん</sup>が、のちの人生<sup>じんせい</sup>の方向<sup>かうきやう</sup>を決定<sup>けつてい</sup>づけています。これを、

「運良<sup>うんりやう</sup>く、時代<sup>じだい</sup>の流れ<sup>ながれ</sup>に乗<sup>の</sup>っただけ。」という人もいます。

しかし、当時の宿毛<sup>しゆま</sup>の人々<sup>ひと</sup>も必死<sup>ひつし</sup>でした。またたく間に訪<sup>おとす</sup>れるいくつもの選択<sup>せんたく</sup>に対して、瞬時<sup>しゆんじ</sup>に判断<sup>はんだん</sup>しなければ命<sup>いのち</sup>にかかわる時代<sup>じだい</sup>です。周<sup>まわ</sup>りの空気<sup>くわいき</sup>を敏感<sup>びんかん</sup>に感じながら、積み重ね<sup>つみかさね</sup>てきた学問<sup>がくもん</sup>、経験<sup>けいけん</sup>、意見<sup>いけん</sup>を土台<sup>どたい</sup>に判断<sup>はんだん</sup>していったのです。「運良<sup>うんりやう</sup>く」簡単にできることではありません。

そしてそののちは、小野<sup>おの</sup>義真<sup>ぎまこと</sup>を筆頭<sup>ひつとう</sup>に、地位<sup>ちゐ</sup>を得<sup>え</sup>た人は地位<sup>ちゐ</sup>を、財産<sup>ざいぜん</sup>を得<sup>え</sup>た人は財産<sup>ざいぜん</sup>を、多くの知人<sup>ちじん</sup>を得<sup>え</sup>た人は人脈<sup>じんみやく</sup>を、それぞれ惜しみもなく投げ出して、宿毛<sup>しゆま</sup>の後輩<sup>こうはい</sup>を援助<sup>えんじゆ</sup>し、育てたのです。これが多くの豊かな人材<sup>じんざい</sup>を世<sup>よ</sup>に送りだした、大きな原動力<sup>げんどうりよく</sup>になったのです。

## 宿毛領主伊賀氏のその後

## 伊賀陽太郎のパスポート



このような風土<sup>ふうど</sup>を宿毛<sup>しゆま</sup>に育<sup>そだ</sup>み続<sup>つづ</sup>けた、宿毛領主<sup>しゆまのりやうしゆ</sup>伊賀氏<sup>いがし</sup>。

氏理<sup>うじさと</sup>は、幕府<sup>ばくふ</sup>がなくなり、藩<sup>はん</sup>もなくなると、同時に宿毛領主<sup>しゆまのりやうしゆ</sup>ではなくなりました。

高知市<sup>たかちし</sup>、そして東京<sup>とうきやう</sup>に移<sup>うつ</sup>って晩年<sup>ばんねん</sup>をすごします。

陽太郎<sup>やうたろう</sup>は、イギリス<sup>りゆうがく</sup>に15年間<sup>おさめ</sup>留學<sup>りゆうがく</sup>して学業<sup>がくぎやう</sup>を修<sup>おさめ</sup>め、帰国<sup>きこく</sup>後は一橋<sup>いちきやう</sup>大学の教師<sup>けいし</sup>になりました。陽太郎<sup>やうたろう</sup>が外国<sup>げんそん</sup>行き<sup>き</sup>に使<sup>つか</sup>った当時<sup>きちやう</sup>のパスポート<sup>ぱすぽーと</sup>は、現存<sup>げんぞん</sup>する貴重<sup>きちやう</sup>な資料<sup>しやうりやう</sup>です。

留學<sup>りゆうがく</sup>中には油絵<sup>あぶらえ</sup>を描<sup>か</sup>いていたようで、同じ下宿<sup>げしゆく</sup>にいて帰国<sup>きこく</sup>後<sup>ご</sup>日本<sup>にっぽん</sup>に洋画<sup>やうが</sup>を伝<sup>つた</sup>えた徳島<sup>とくしま</sup>県<sup>けん</sup>の井上<sup>いの上</sup>弁次郎<sup>べんじらう</sup>は、陽太郎<sup>やうたろう</sup>に洋画<sup>やうが</sup>を習<sup>まな</sup>ったと言<sup>い</sup>っています。

また、陽太郎<sup>やうたろう</sup>の次<sup>つぎ</sup>の代<sup>しろ</sup>、氏広<sup>うじひろ</sup>はユニークな人生<sup>じんせい</sup>を送<sup>おく</sup>りました。

日本初の国産飛行機<sup>せいさく</sup>を製作しようと人生をかけて没頭<sup>ぼつとう</sup>します。

特許<sup>とっきょ</sup>をたくさんとって、試作も数機完成しますが、エンジンの不調<sup>ふちよう</sup>で残念、離陸<sup>りりく</sup>することができませんでした。

しかし、その一歩は日本飛行機史に大きな功績<sup>こうせき</sup>を残し、「伊賀式飛行機」として、飛行技術<sup>はってん</sup>発展の一頁<sup>ページ</sup>に記<sup>しる</sup>されています。